	問 4
を文中から九字で書きぬきなさい。	――線④「どうしても割ってやる」に表れている「僕」の気持ち
	に表れている
	僕」
	の気持ち

_	5		
の「僕」の気持ちをまとめた次の[			こうドラーラグー でもころこう
にあてはまることばを三十	す」とありますが、このとき		
		の「僕」の気持ちをまとめた次の[	の 「僕

問

思いどおりに遠足に来たものの、 気持ち。

1	
l .	

やれる心は持ち合わせている。 ア 幼さゆえに感情的になるところはあるが、他人の気持ちを思いものとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。問6 この文章から読み取れる、六年生のときの「僕」について述べた

ウ 事実をしっかり理解する力は持っていながら、それに気付いてないことにむきになる傾向がある。 自分の感情を理論的に分析できはするが、理屈でなっとくでき

エ 一見従順だが、人からどう思われるかを気にして行動するとこいないふりをするずるさが見られる。

ろがある。
「一見従順だか」人からどう思われるかを気にして行動するとこ

きた。常念寺の土塀の西南のすみに小さな家が土塀によりかかるように らなかった。むしろ足ははやくなった。そして通りすぎてしまい、それ があいていて中は暗い。人がいるのかいないのかコトリとも音がしない。 なかったのだろう。やがていつもは通らない村はずれの常念寺のまえに こういうことがあった。ある朝久助君が教室にはいってくると、ちょう きりだったのである。 (じじつ、すこし傾いている。)たっている。それが兵太郎君の家である。 れにしても、それほどよくきく薬ならなぜもっと早く持っていってやら もっていった。ほんとにそうだ、と知らないくせに久助君も思った。そ ンで熱をとればすぐなおってしまうと、音次郎君は医者のように自信を だそうである。兵太郎君はかぜをひいたのがもとだから、このアスピリロ ところへ薬を持っていくからいっしょにいこうとさそった。久助君はび 次郎君が、ある午後裏門の外で久助君を待っていて、いまから兵タンの それだけであった。それからこういうことがもう一度あった。薬屋の音 れのだい。」と何げなくきくと、ひとりが「兵タンのだよ。」と答えた。 どいきちがいに、ふたりの級友が机を一つ廊下へさげ出していった。「だ あいだ久助君は兵太郎君についてほとんど何もきかなかった。ただ一度 っくりしたが同意して出かけた。薬はアスピリンというよく熱をとる薬 二か月、三か月とすぎた。まだ兵太郎君は学校に姿をみせない。

すれっぽくなった。何かしかけてわすれてしまうようなことが多かった。そして、ひとりでぼんやりしていることが多かった。それからひどくわ、久助君はほかの友だちと笑ったり話したりするのがきらいになった。

たか、いくら頭をしぼってもおもいだせないというふうであった。お使 まるでラジオできく落語みたいだと笑われたこともあった。 いま手に持っていた本が、ふと気づくともう手になかった。どこにおいエ いにいって、買うものをわすれてしまい、あてずっぽうに買って帰って

殺風景にあじきなくみえ、そういうもののなかにあって、自分の魂が、ちきぶらけ 耳にした。糸当のあと久助君は教壇のわきでひなたぼっこをしていた。 というものが、いっそうみじめな、つまらないものに思えるのであった。 死なねばならぬ (久助君には兵太郎君が死ぬとしか思えなかった。) 人間 また、冷たい水にわずか五分ばかりはいっていただけで、病気にかかりヨ ならぬのかと思って、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあった。 あったが、このころはいっそうそれが多く、 ょうど茨のなかにつっこんだ手のようにいためられるのを感じることが んなつまらない、いやなところに、なぜ人間はうまれて、生きなければ 三学期の終わりころ、ついに兵太郎君が死んだということを久助君は もとから久助君は、どうかするとみなれた風景や人びとの姿が、ひどく いっそうひどくなった。こ 40

すると、 「兵タンが死んだげなぞ。」 向こうのすみで話し合っていた一団の中から、

とひとりがいった。

「ほうけ。」

どろかなかった。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。⑸ と他の者がいった。べつだんおどろくふうもみえなかった。久助君もお 「うらのわら小屋で死んだまねをしとったら、ほんとに死んじゃったげ

とはじめのひとりがいうと、 んだまねや腹痛のまねのうまかったことをひとしきり話し合った。 久助君はもうきいていなかった。ああ、とうとうそうなってしまったの 他の者たちは明るく笑って、兵太郎君の死

> ⑤ロットサーーーーーーといって、ましげに、みにくくみえた。手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくくみえた。 のかと思った。そっと片手を床の上の陽なたにはわせてみると、自分の 日暮だった。

久助君の体のなかに漠然とした悲しみがただよってい

いような、妙にちぐはぐな感じのひとときであった。 昼のなごりの光と、夜のさきぶれの闇とが、地上でうまくとけあわな5

久助君の魂は、長い悲しみの連鎖のつづきをくたびれはてながら、 旅

人のようにたどっていた。 微妙な、 そして豊富な物音が、戸外にみちていた。

れでいて静かだった。 六月の日暮の、 そ

久助君は眼を開いて、柱にもたれていた。何かよいことがあるような

りの仔山羊を、ひるま川上につれていって、昆虫を追っかけているうち ききとめた。久助君はしまったと思った。生まれてからまだ二十日ばか すると遠いざわめきのなかに、一こえ仔山羊のなき声がまじったのを

とりで帰ってきたのだと確信をもって思った。 ついわすれてきてしまったのだ。しまった。それと同時に、仔山羊はひ

久助君は山羊小屋の横へかけ出していった。川上の方をみた。

仔山羊は向こうからやってくる。

んな姿だけが、 久助君にはほかのものは何も眼にはいらなかった。仔山羊の白い 仔山羊と自分の地点をつなぐ距離だけがみえた。

仔山羊は立ちどまっては川縁の草をすこし喰み、またすこし走っては

立ちどまり、無心に遊びながらやってくる。

るのだ。 久助君はむかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまでく

仔山羊は電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。 あの土手の

47

こわれたところもうまくわたったのだ。よく川に落ちもせずに。 久助君は胸が熱くなり、なみだが眼にあふれ、ぽとぽとと落ちた。 仔山羊はひとりで帰ってきたのだ。

久助君の胸に、今年になってからはじめての春がやってきたような気

がした。

う確信を持っていたので、あまりおどろかなかった 久助君はもう、 兵太郎君が死んではいない、きっと帰ってくる、とい

着かえた兵太郎君が白くなった顔でにこにこしながら腰かけていた。 教室にはいると、そこに――いつも兵太郎君のいたところに、洋服に

まま、 兵太郎君といっしょに笑い出した。 久助君は自分の席についてランドセルをおろすと、眼を大きく開いた 兵太郎君をみてつっ立っていた。そうすると自然に顔がくずれて、

かった。だがもうそんなことはどうでもよかった。兵太郎君は帰ってき らきいた。川のことがもとで病気をしたのかしなかったのかはわからな してもそこがいやで帰ってきたのだそうである。それだけ久助君は人かw 兵太郎君は海峡の向こうの親戚の家にもらわれていったのだが、どう

たとき、 く思われた。 たなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうに尊く、美し 休憩時間に兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのを窓からみ 久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思った。そしてめっタ (新美南吉 

\*2閾=門や出入り口などのしきりにしく横木。

\* - 兵太郎君 = 二、三か月前に久助君たちと川遊びをしていて、

あいが悪くなり、それから学校へ来ていない。

\*3茨=とげのある低木。

4喰む=食べる。

どこまでですか。文中から初めと終わりの六字を書	問1 ――線①「自信をもっていった」
わりの六字を書きぬきなさい。	た」音次郎君のことばは、どこから

	糸() 目付きにこう。 言次良気のことにし、ここのよ
	どこまでですか。文中から初めと終わりの六字を書きぬきなさい。
	\$
問 2	- ――線②「ふたり」とはだれとだれですか。
問 3	線③「ふた!
	た」とありますが、このときの「ふたり」の心情を述べたものとし
	て最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。
	ア 兵太郎君の家のなごやかなふんいきを感じ、これなら兵太郎君
	も元気にちがいないと確信している。
	イ 兵太郎君の家のしんとしたふんいきが兵太郎君の病気の重さを
	物語るように思え、不安が強まってきている。
	ウ 二人とも猫が苦手なので、飛びかかられたらどうしようと、お
	びえている。
	エ 家の中からもし兵太郎君が出てきたら、どんな話をすればよい
	かわからないと、とまどっている。
問 4	・ ――線④「何かしかけてわすれてしまうようなことが多かった」
	とありますが、そのような久助君のお使いの様子をたとえた八字の
	ことばを文中から書きぬきなさい。

久助君は人間の生

## 文の成分

文は次のような型に分けることができます。

- 1 何 (だれ)が一何だ。
- 2 何 (だれ) が—どうする。
- 3 何(だれ)が一どんなだ。
- 4 何(だれ)が一ある(いる/ない)。

ら分けたものを文の成分と言います。 「どんなだ」「ある(いる/ない)」にあたる部分を**述語**と言います。 主語や述語のように、文を組み立てている文節を、はたらきの上か 右の型の「何(だれ)が」にあたる部分を主語、「何だ」「どうする」

例 山主語 父注語 高述語。 音楽家だ。

風主が語 ふば語

家が語 ある語

文の中で、 他のことばをくわしく説明する(修飾する)ことばを修

飾語と言います。

例 今日、修飾語 ぼくは 主語 パンを 食べた。

示し、ともに「食べた」をくわしく説明しています。 「今日」はいつ「食べた」のか、「パンを」は何を「食べた」のかを

他の部分からわりあい独立している独立語があります。 文の成分には他に、前後の文やことばをつなぐはたらきの接続語

> えなさい。 次の各文は、あとの文の型のどれにあたりますか。それぞれ記号で答

(2)ぼくが今食べたいのはたいやきだ。

(4) (3) 隊長は司令室の中にいます。

春にはいろいろな草花が芽を出す。

何 (だれ)が―何だ。

1 何 (だれ) が-どうする。

ウ 何 (だれ) が-どんなだ。

エ 何 (だれ)が一ある(いる/ない)。

**2** 次の 三角定規も算数の勉強に必要な道具です。 -線部の述語に対応する主語を一文節で書きぬきなさい。

(2)人でできないときはぼくが手伝うよ。

**3** 次の 線部の主語に対応する述語を一文節で書きぬきなさい。

(1)空は時間によって色をころころ変える。

(2)ぼくらのかくれがは森の木の上にある。

*50* 

① 波に反射した光がきらきらとかがやく。 4 次の各文から、主語と述語をそれぞれ一文	() 波に反射した光がきらきらとかがやく。 次の各文から、主語と述語をそれぞれ一文節で書きぬきなさい。	4 春に花だんに植えた花が、今はきれいにさいています。
主語		) 5 とても大きなトラックが目の前を横切った。
(2) 本当に一人でるすばんをするのね、	のね、あなたは。	
主語	<b>述語</b>	
③ ぼくは君の絵をすばらしいと思うよ。	思うよ。	6 次の──線部のことばをくわしく説明している修飾語をすべて書きぬ、
主語	述語	1)わたしたちょ、何度も水を飲んだ。  きなさい。
(4) 一体だれが勝つだろうか、明	明日の試合で。	
主語	述語(	) (2)とても大きく強そうな力ブトムシに糸をつけて引っ張らせた。
(1) あさって、ぼくは父といっし一文節で書きぬきなさい。 ケーション かんしゅう かんしゅう かんしゅう おいっしん あいましん あいましん おいっしん かんしん いっしん かんしん かんしん しゅうしん かんしん しゅうしん しゅうしん かんしん しゅうしん かんしん しゅうしん かんしん しゅうしん かんしん しゅうしん しゅうしん かんしん しゅうしん しゅうしん しゅうしん しゅうしん しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう かんしん しゅうしゅう しゅうしゃく しゅうしゅう しゅう	っしょに北海道に行きます。どのことばをくわしく説明していますか。	(3) あなたにわたしの友人が手紙を預けたと聞いたのですが。
(2) あの人はギョーザを腹いっぱい食べたいと言っています。	い食べたいと言っています。	く た。 (4) 木のかげから現れた男は、さっと地図をわたすとすぐにいなくなっし
(3) 月にはうさぎがもちつきをし	月にはうさぎがもちつきをしているように見える模様がある。	です。